

世界は新型コロナウイルスにより、日常の生活を失いつつある。

コロナ禍により生活が一変してしまった方、仕事を失ってしまった方、感染して入院された方。皆夫々に大変な経験をしている中で何かに気づき、何かを学び、少しずつでも前を向いて生きて行こうとする多くの皆様の姿に心を打たれた。人は一人では生きていけない。相手を思いやり、労わり、手を差し伸べる。新型コロナウイルスは忘れていた何かを思い出させてくれた。

人間ドックも同じだ。相手を思いやり、労わり、手を差し伸べるにより、総合的な成果が発揮できると信じている。

私は当時（昭和53年頃）健康保険組合の事務を担当していた。

職務柄、皆様へ人間ドックを勧めるのも一つの役割であった。その結果は色々であった。

①「ガンが見つかり、「早く治療できて良かった」と喜んでくれる人。
②「異常がなくて安心したよ。しかし、医師から生活習慣に対し、厳しい指摘を受けた。酒の量も控えるよ」

③「糖尿病に注意するよう指摘を受けた。運動の大切さが理解できた。体重も減らすよ」

④「煙草の怖さを知った。百害あつて一利なし。明日から禁煙に努めるよ」

反省の念が顕著な彼、彼女達。やりがいのある業務であった。

健保組合として人間ドックに注力してやった結果、病気の早期発見となった。組合は支出が減り、財政的にも非常に貢献した。それと共に、皆さん方の健康の維持向上に寄与し、明るい家庭を築くことができたことは大きな喜びであった。

国としても、国民医療費の削減と国民の健康増進のために、人間ドックは大切に推奨されるべきだと感じた。

妻は、健康で、謙虚で誰にも優しく皆さんから愛され親しまれていた。

私にはできすぎた伴侶だった。幸せで健康な結婚生活で、3人の男児を授かった。

人間ドックの結果、医師によられた。妻が「がん」であることを告げられた。「まさか！私はどうした。今ほど医学も進んでおらず、がんは即、死だと

思っていた。事態の急変に、心がついていかなかった。なぜ健康な妻が、病気になるのか信じられなかった。私は毎日仕事が終わると見舞いに駆け付けた。健康だった妻の手は、注射の跡で青ずみ、顔色も冴えなかった。身体も細くなっていた。手をさすり、静かに語りかけるのが私にできる唯一の道であった。

手術後、妻は私の手を握り「できるだけそばにいてくださいね」と目を潤ませて言った。

死を覚悟しているようであった。その時、私は心から妻を愛おしく思った。死なせたくない、助かつてくれと心から祈った。

勤め先の直属の上司N課長が見舞いに来てくれた。「今は大変だと思う。一番苦しい時に人間の真価が分かる。仕事も大事だが、奥さんのためにできるだけ尽くしなさい。奥さんを安心させることが大切だ」と彼は言ってくれた。

更に「君も知っているように私は一人息子の一郎をガンで亡くした。5年前のことだ。その時、君は何度も息子のため献血をしてくれた。あらためて礼を言うよ、ありがとう」。

「私なりに看病は尽くしたつもりであるが、心残りがあつた。小5の子どもが最後に苦しい息の中で「さようなら、ありがとう」と言つてこの世を去つていった。もう少し彼のため、できることはなかったのかと今でも思っている。早期の健診を受けさせておればと今でも悔やまれる」。

「一郎は建築士になる夢をもち『親父たちの家を建ててやる』と言っていた。『療養中も彼の『おはよう』の一言が嬉しかった。一日が幸せで、明日も早起きしたいと思つたよ』。N課長は眉の濃い眼の涼しい男だ。声は静かだが、歯切れのいい、てきぱきとした話しぶりであった。命の大切さを示し、話してくれ

た。

スタッフの皆様方の懸命な努力と幼い3人の子供を残して死ねないという妻の強い気持ちを通じたのか、奇跡的に病は治った。

退院時「よかった。よかった。よく頑張りましたね。もう大丈夫ですよ」と言ってくれた医師の嬉しそうな表情が今でも忘れられない。人間ドックを受けていなければ今の生活はない。スタッフに見送られ病院を出る時、妻はぼつりと「皆さんが神様のように見えたわ」とつぶやいた。

妻の明るい笑顔と頬を伝わっていた一筋の涙を忘れることはできない。

九州では珍しく大雪が降っていた。